コラム＝木を植える◎資料の紹介

アメリカの週刊誌*TIME*は一九九〇年四月二十三日号で「地球の日（四月二十二日）」特集を組んだ。この特集の中で同誌は地球を守るための方策の一つは「国際的に大規模な植林計画をスタートさせる」ことだとしつつ、次のように指摘している。「大規模に植林しようという話は誰もが好んで口にする。ユニオン・カーバイドのような大企業も二〇〇〇年までに五〇万本植林すると言い出したし、アメリカやオーストラリアの政府高官に至っては各々一〇億本の木を植えると公約している。しかし資金の手当は本当にうまくいくんだろうか？」。

資金の手当ばかりが問題なのではない。植林をとりわけ熱帯地域で行うとなると実にさまざまな問題に直面することになる。ここに紹介するのはほんの一例である。

◉なぜ火をつけるのか？

植林は必ずしも無人の地で行われるわけではない。とくに、人口圧力の高い途上国（熱帯）では、人々がそれまで焼き畑や牧畜を営んでいた土地で造林事業を行うのが通常である。当然のことながら、こと志とは異なり、植林事業を現地住民が歓迎する、事業に協力してくれるとは限ら

ないのである。林業に携わる人たちが最も恐れるのは山火事だそうだが、その山火事が造林地周辺でも頻発する。国際協力事業団が一九七五年からフィリピンのパンタバンガンで実施している林業開発技術協力プロジェクトでの経験を、藤村隆氏は次のようにまとめておられる。なお、同氏がこのプロジェクトに主席顧問として携わられたのは一九八〇年から八三年にかけてのこと。この間、八一年六月にはプロジェクトセンターが新人民軍（ＮＰＡ）部隊に襲撃されるという事態にも直面された。

「山火事が発生するたびに、専門家は寿命が縮まるおもいをするが、不思議なことに地元民は驚きもしないし、残念のような顔もしない。むしろ乾季には、当然、山火事があってしかるべきといったような顔をしている。しかし、よくよく考えてみれば、それもその筈である。

この地域は過去数百年、否、もっと古くから焼畑移動耕作が繰り返されてきた。人々は、森林を焼いて畑を作り、生活を営み、やがて地力が劣えて雑草地となると、今度は家畜を放牧し、乾季になり雑草が枯れたところを見計らって火を放つのである。すると、焼け跡から新しい雑草が生えてくるので、再びそれを家畜に食べさせて、生活を営んでいるのだ。

したがって、この地域の人々にとっては、山火事を発生させることは、生活のための絶対必要な手段であり、むしろ歓迎されるべき行為なのである。それを一九七〇年代に入って、突如として政府が、「水源涵養のために、パンタバンガンの森林造成が必要だから協力せよ」といっても、地元民にとっては、結果的には牧草地が狭められ、生活が苦しくなるだけである。このような場合は、政府が当然地元民に対して、保護または助成策をとるべきだが、そんなことは全く期待で

きないのである。現在、地元民が、表向きでも、山火事防止に協力していてくれるのは、造林事業や林道事業などに出役することによって、いくらかでも現金収入が得られるからだと思う。聞いた話で真偽のほどは確かめていないが、地元民の中には、やがて造林事業が終わると、解雇されて現金収入がなくなるので、何時までも造林が終わらないようにするために、造林地に放火する不心得な者もいるそうだ。これが本当だとすると、大変な新たな問題が提起されることになる。

このように山火事防止の問題は、総論では理解されてきているが、掛け声だけでは、減少しないのである。ましてや、造林のために強権をもって排除するようなことをやれば、山火事は増加することはあっても、減少することはないと思う。」（藤村隆著『貧困・山火事・NPAの谷間で―フィリピン・パンタバンガン森林造成プロジェクト主席顧問の手記』林業経済新聞社　一九八六年　八八―八九ページ）。

◉農業と林業の共存

同事業団の南スマトラ森林造成プロジェクト（一九七九年～）に派遣専門家として参加した有原元博氏（一九八三年～八六年、その後ハーバード大学客員研究員）も現地住民の火入れに苦しめられた一人である。

「毎年七～八月頃になると、アランアラン草原には終日、火入れによる草原火災が発生し、消防・消火作業をしいられる。これらは焼畑地拵へのためのものと、放牧のための火入れであり、山火事発生地図を作ってみると、同じ所が何回も真黒にぬりつぶされてしまう。その規模と延焼

は想像を絶するほどであり、一九八二年度乾期にはバイ煙のため定期航空路（パレンバン―ジャカルタ）が閉鎖されたほどである。

さらに、現地において実態をよく観察するうちに、焼畑地拵えのための火入れは比較的良くコントロールされたものであることにくらべて、放牧のための火入れは一般に無秩序で、よく晴れた乾燥した日の午後～夕方にかけて発生する傾向があり、森林造成にとって重大な脅威となることが判明した」（有原元博著「森林破壊と熱帯農業―南スマトラの焼畑農民」一九八八年　未公刊三四ページ）。

同氏は生きるために火入れをせざるを得ない現地住民の生活実態に関し詳細な調査を行っているが、その一つの結論として次のように述べている。

「荒廃草原・荒廃二次林を森林に復興させようとするいかなる試みも、現地住民である彼らの生活基盤をうばう結果となっては、森林造成事業そのものが成立しえない……林業にとって最大の脅威は、乾期の野火・山火事であり、何度も繰り返したように、火入れを多用する草原焼畑方式をおさえ、放牧のための無秩序な火入れをいかにコントロールするかにかかっている。地域開発（林業開発）を進めるにあたっては、地域農民のニーズと林業の利益をいかに調整するかに、造林事業そのものの成否がかかっているわけである。」（有原　同上　六四―八三ページ）。

そこで同氏が提案するのが「個別連合開発方式―おのおの別個の性格を持つプロジェクトを連合させる」農林業地域開発である。次にこれを紹介しておこう。

「村落はそこに農民が生活し、営農活動を実施しているのであるから、まず各村落のSocio Eco-

nomic Conditionを十分に把握して、各村落の農業形態にあったプロジェクトをはめこんでゆき、村落周辺には牧草地や薪炭林を設定して、その集落を中心にして、経済・社会条件が充分みたされ、林業と農業が共存できる様、プロジェクト側が配慮してゆかねばらない。

このようにして、村落の周辺にその村落の実態にみあう小型プロジェクトをパズルのように、ひとつひとつはめこんでゆく。最初は矛盾や試行錯誤のくりかえしであるが、各小型プロジェクトがなじみ、それぞれの効果を発揮するようになって、はじめて、プロジェクトと地域社会の共存が成立するようになるのではあるまいか？」（有原　同上　八七—八八ページ）。

◉火田整理—韓国の事例

工業化の成功により今では途上国からの「卒業」すら云々されている韓国。この国はまたその開発の過程で森林被覆率を回復し得た世界でも例外的な国である。

韓国における緑造りはいわゆる「セマウル」運動の一環として、政府の強力な指導の下で行われてきた。「苗木や肥料は無償で供与され、林業技術指導も活発に行われた」（神足勝浩著『熱帯林のゆくえ—みどりの国際協力』築地書館　一九八七年　一六五ページ）。しかし、同国の成功の最大の要因は「（緑化が）農林省の管轄ではなく、内務省直轄事業とされ、その傘下で、地域住民の生活改善、土地利用の整理等の事業と結び付けられて推進された」（神足　同上　一六五ページ）ことに求められよう。この国では火田（焼畑）の整理と火田民の移住・生活の安定化が政府の手で推し進められ、これと並行して造林も行われたのである。熊崎実筑波大学教授は韓国の火田整

理を紹介された論文（高栄禄・熊崎実著「韓国における火田整理―江原道での経験を中心に」『林業技術』一九八〇年二月号　一七―二一ページ）の中で、次のような評価を与えておられる。

「周知のように、多くの発展途上国では現在なお焼畑耕作が横行し、森林資源の浪費はもとより、水・土保全機能の低下を通して食糧生産にまで由々しい影響を与えている。各国とも各種の規制措置を講じてきたけれど、失敗に終わるケースがあまりにも多い。韓国の火田整理の経験は、焼畑耕作に悩む国々にとって貴重な教訓となるであろう。すなわち法律で焼畑を禁じ、農民を山林から権力で追い払うだけでは何の解決にもならないこと、そして火田民が他の場所で生活できるような社会政策が不可決であることを示唆しているように思う。」（高・熊崎　同上論文　一七ページ）。

韓国の火田整理の内容の詳細については高・熊崎論文を参照されたい。

◉みどりの国際協力―長期の視点を

環境の保護といえば誰もが口にするのを好むという植林。とりわけ熱帯におけるそれがいかに難事業であるかは、これまで紹介してきたいくつかの資料からもお分かりいただけたのではないかと思う。最後に長く海外への植林技術協力に携わってこられた神足勝浩氏の言葉を紹介し本コラムの結びとする。

「他の分野の国際協力ではこんなに試行錯誤を繰り返すことは少ないであろう。たとえば診療所や病院の建設事業に失敗などはありえない。また、あってはならない。それだけに援助の成果

はすぐに見え、相手国の喜びも大きいが、評価も直接的で厳しいのが常である。しかし、みどり造りにはそのような短時日での成功など存在しない。造林は想像以上の時間と工夫が必要である。」（神足　前掲書　九八ページ）。

（藤崎　成昭）